



イスラームにおける天国の表象

東京大学大学院 人文社会系研究科

教授 竹下 政孝

イスラームの来世観

来世を信じることはイスラームの最も重要な教えの一つである。現世は来世の準備のために存在するといっても言い過ぎではない。それゆえこの世で善行を行った信者たちにどのような褒賞が用意されているか、また、悪行を行った不信者たちにどのような罰が用意されているかは、信仰厚き人々にとっての最大の関心事であり、死後の生活についての詳細な情報を与える多くの本が書かれてきた。イスラームの教えにおいては、死後の生活は最後の審判以前と以降とで大きく分かれる。死んでから最後の審判の日までの期間は、預言者や聖者、殉教者などの選ばれた人々以外は、墓の中で過ごす。最後の審判の日に死者たちは墓から蘇って、神の審判を受け、天国あるいは地獄に送られる。天国と地獄こそ、人々の永久の住処であり、この世の生活は仮の住処にすぎない。天国と地獄に関しては、啓典であるコーランや預言者ムハンマドの伝承(ハディース)に多くの記述があり、後世それらをもとにして、説教師たちが想像力を存分に働かせてその様子を信者たちに生々しく描写した。もちろん説教師たちも、天国や地獄を実際に見聞したわけではないのだから、描写が必ずしも整合的ではなく、多くの矛盾点や曖昧な点が残るのはしかたがない。本稿では、これらの中世の説教師たちの著作に基づいて、中世のイスラーム教徒が持っていた天国のイメージを紹介したい。

天国の構造と景観

天国を指す最も一般的な名前はジャンナである。ジャンナのもともとの意味は「庭園」であり、旧約聖書にあらわれるヘブライ語のガンという言葉と同じ語根である。ガンという語も、本来は「庭園」の意味であったが、比喩的に天国の意味で使われるようになった。本稿では、ジャンナに「天国」という訳語を使うが、本当は「天国」より「楽園」という訳のほうが正確であろう。イブン・アッバースの伝える預言者ムハンマドの伝承によると、天国は八つの庭園(ジャンナ)から成り立っている。八つの庭園とは、白真珠からできている「莊厳の住まい」(ダール・ジャラール)、赤いルビーからできている「平安の住まい」(ダール・サラーム)、緑のエメラルドからできている「避難の庭園」(ジャンナ・マウワー)、黄色の珊瑚からできている「永遠の庭園」(ジャンナ・フルド)、白銀からできている「喜びの庭園」(ジャンナ・ナイーム)、黄金からできている「極楽の庭園」(ジャンナ・フィルダウス)、赤真珠からできている「エデンの庭園」(ジャンナ・アドン)、黄金からできている「確定された住まい」(ダール・カラール)である。最後の「確定された住まい」は天国内の住宅地域であり、そこにある城館は天国全体を見下ろしている。その城館には、二つの門があり、その両扉は金と銀でできている。建物には、金と銀の煉瓦が使われ、粘土には麝香が、

土には琥珀が、藁にはサフランが使われる。城館は、真珠でできており、部屋はルビーで、ドアは様々な宝石でできている。

これら八つの庭園の名称はすべて、コーランの中にあらわれる。エデンの庭園は旧約聖書によれば、アダムとイブが罪を犯す前に住んでいた庭園である。コーランでも、アダムとイブは天国に住んでいたことになっているが、この天国が、最後の審判の後、信者たちが行く天国と同じところかどうかという問題に関しては、神学者たちの間で議論がある。アダムとイブの住んでいたエデンの園は、この地上のどこかにあったという説も有力である。ティグリス川とユーフラテス川の合流地点であるイラクのクルナ村が、エデンの園であったというアラブ人の言い伝えもあり、クルナ村には「ここにエデンの園があった」という表示板もあったらしい(矢島文雄『ミステリアスな文化史』1994年、中央公論社 p 202)。また「極楽」と訳したフィルダウスという語は、もともとパイリダエーザという古代のペルシャ語で「囲まれた土地」を意味し、古代ペルシャの王が狩猟遊びをした場所であった。この語が古代ギリシャ語に入って、パラダイソスとなり、さらに旧約聖書のギリシャ語訳(紀元前3～2世紀頃)の中で、前述のヘブライ語のガンの訳語として使われたことにより、天国の意味になり、英語のパラダイスを通して、現在の日本でもよく知られる語になった。

さて、この八つの庭園の相互の位置関係について明瞭な説明を与えている伝承はない。ある伝承では、天国は100の層からなり、各層にそれぞれ天と地があって、天国の下層の住人たちは、ちょうど空の星を眺めるように天国の上層の方を眺めるという。それゆえ、八つの庭園も「確定された住まい」を頂点とした階層構造をなしているように思われる。もっとも、八つの庭園の中で、最も高い庭園は、「エデンの庭園」であるという伝承や、「極楽の庭園」であるという伝

承もあって一定していない。天国の住人の間にもランクがあることは、ブハーリーの伝える「天国の人々は彼らの上にいる天幕の人々を、ちょうど東から西まで地平線を横切る星々を見るように見る。彼らの間の隔たりはこのように大きい」という伝承からもわかる。「天幕」と訳したグラフという語は「高所」の意味であるという説もある。それではこれらの八つの庭園はどこにあるのだろうか。天国というのだから、当然、天にあるのだらうと思われるのだが、アラビア語のジャンナには、日本語の天国や英語のHeavenのような天という含みはない。ある伝承では、神は天と地を創造したときに、天国と地獄をも創造したといわれているので、一応、天と地とは、現世の宇宙とは別の次元の世界であるようにも思われる。しかし、「ジャンナはどこにあるのですか」という質問に対して、「天にある」と答えている伝承も存在する。また天の上にあるとする説もある。最後の審判の日までは、天国と地獄は天と地とは別のところにあるが、最後の審判の日に現在の天と地が消滅したとき、天国は天のあった場所を吸収し、地獄は現在の地のあった場所を吸収して拡大するという伝承もある。すでに述べたように、大部分の人は最後の審判の日の後で、天国と地獄に行くわけだから、それ以前は、天国も地獄も住民はほとんどいないのであまり広くはないのであろう。天国も地獄もまだ創造されておらず、最後の審判の日になって創造されるというムータジラ派の説もあるが、この説は異端とされている。

天国の川

天国は、緑あふれ、あらゆる種類の果実がたわわに実り、多くの川が流れる「庭園」である。そこには、「腐ることのない水を湛える川、味が変わることのない乳の川、飲むものに快い美酒の川、純良な蜜の川」(『コーラン』47章15節)の四つの川が流れている。これらの川はカウサ

ル(潤沢)の池に注ぎ込んでいる。これらの四つの川の水源地は、真珠のドームを持つ巨大な建物で、エメラルドの門に黄金の錠がかかっている。四つの川は、このドームの四隅から流れ出している。「慈悲深き、慈愛あまねきアッラーの御名において」(Bism Allah al Rahman al Rahim)というアラビア語の四語が、建物の四隅に書かれており、水の川は、最初の語 Bism の m のところから、乳の川は、Allah の h のところから、酒の川は、Rahman の m のところから、蜜の川は、Rahim の m のところから流れ出している。つまり、この四つの川の水源地は、ムスリムが日常生活で頻りに口に「慈悲深き、慈愛あまねきアッラーの御名において」という文句そのものであり、現地でもこの言葉を純粋な心で唱えた者は、来世でこれらの川から飲むことができるのである。

また別の伝承では、川の名前は「慈悲の川」(ナフル・ラフマ)、「カウサル(潤沢)の川」、「カーフル(樟脳)の川」、「挨拶の川」(ナフル・タスリーム)、「サルサビール川」などと列挙される。カーフルとサルサビールは、元来はコーラン第76章にあらわれる泉の名であるので、その泉から流れ出す川であろう。「潤沢の川」はコーランに「本当にわれ(神)は、あなた(ムハンマド)にカウサル(潤沢)を授けた」(108章1節)とあるので、特に預言者ムハンマドの川であるとされる。しかし、前述したように、カウサルを池の名前とする伝承もある。「慈悲の川」は、八つの庭園全体を流れるいわば天国の川の本流で、その川原の石は真珠であり、その水は雪よりも白く、蜜よりも甘いとされる。もっとも、カウサル川を本流であるとして、同じような描写を与える伝承もある。

興味深いのは、ナイル川、ユーフラテス川、ジャイハーン川、サイハーン川の四つの川が、天国から流れ出しているという伝承である。ジャイハーン川、サイハーン川は、現在のトルコ

南部の平野を流れて地中海に注ぐ二つの川で、かつては、アラブ・イスラーム帝国とギリシャ・ビザンチン帝国の境界線となっていた川である。天国と地上とはどこかでつながっているのであろうか。

天国の動植物

天国に住んでいる動物の数はあまり多くない。アリーの伝える伝承によると、天国には、翼を持ち、真珠とルビーが嵌め込まれた鞍を持つ馬がいる。しかし、すべての天国の住民がこの馬に乗れるというわけではなく、聖者たちだけが、この馬に乗って天国の空を翔るといふ。面白いのは、天国で鳥が飛んでいるのを見て、住人がその鳥に食欲を感じたら、たちまち、その鳥は焼き鳥となってその人の手中に落ちてくるといふ伝承である。鳥は観賞用というよりは、食用とみなされていることがわかる。またラクダの大きさの鳥が下りてきて「私の肉はおいしい。わたしは、サルサビール川の水とカーフル川の水を飲み、天国の草を食べて育ったのだから」と叫ぶ。この鳥も、住民が望めば、たちまち焼き鳥となる。動物にくらべて、植物の種類は多い。ナツメヤシ、ザクロ、ブドウなどの様々な果実樹のほか「トゥーバーの樹」の「天の涯にあるシドラの樹」の二本の巨木が天国を象徴する木としてよく知られている。「信仰して、善行に励む者にとっては、至福(トゥーバー)がかれらのものである」(13章29節)というコーランの節にあらわれるトゥーバーは、後代、天国の木の名前として解釈されるようになった。トゥーバーの根は真珠、その幹はルビー、その枝は橄欖石、その葉は金襴でできている。その枝は、45,000本もあり、天国のあらゆる場所に陰を与えている。その果実はこの世のどんな果実とも比べられないくらい美味である。「天の涯にあるシドラの樹」は、その名が示すように天国と神の玉座との境界に位置し、その葉は、

象の耳の大きさで、その果実はじょうろのようである。プハーリーの伝える「天国には、ラクダに乗った人が百年間走ってもまだその陰から出ないほど大きい木がある」という伝承は、シドラの木のことでありという説もある。シドラの木は、普通砂漠に自生するときには、棘を持っているが、天国では誰も傷つけないように棘が抜かれている。

天国の住人たちの食事

天国では、住人たちはほとんど毎日、朝から晩まで終わることのない宴に参加しているかのようである。70のテーブルのそれぞれに金の皿に盛られた70通りの料理が用意される。食事のメニューとしては、コーランによれば、「種々の鳥の肉」(56章12節)、「果物、肉、その外かれらの望むもの」(52章22節)が与えられる。果物は豊富であり、とくにナツメヤシとザクロがコーラン55章68節には言及されている。これらの食事は料理されたものではなく、神の「あれ」という命令によって瞬時に無から創造されたものである。信者たちは、錦の織物を敷いた寝床の上に向かい合ってゆったりと手足を伸ばす。かれらの間を永遠の若さを保つ少年たちが、お酌にまわる。天国では、この世では禁止されていた酒もふるまわれる。「真っ白な美酒は飲む者に心地よい甘さ。これは頭痛も催さず、酔わせもしない。(37章46 - 47節)。天国の住人は、この世以上に豪勢に食べたり、飲んだりするが、放尿したり、排泄することはない。食べたものや飲んだものはげっぷや汗を通して消化される。汗は麝香の香りがする。

天国の住人

天国はすべて巨大なので、天国に入るとき、人間の背丈も約30メートルに巨大化する。ちなみに我々の祖先であるアダムも約30メートルの背丈であったので、もともとの背丈に戻るこ

になる。また老年で死んだ者も、みんな33歳の若さに戻って天国に入る。もちろん天国では年をとらない。

天国に住んでいるのは、この世で善行を積んだ信仰厚いイスラーム教徒たちだが、彼ら以外にも、彼らの快適な生活のために奉仕する多くの人々がいる。飲物を給仕するのは、真珠ともみまがう美少年たちである。そして、フリーと呼ばれる、黒い大きな瞳の完全美の処女たちが、天国の住民たちの性的欲求を満たすために存在する。フリーは、イスラームの天国の官能的性格の象徴として西洋でも有名で、英語の語彙にもはいつているほどである。フリーの肌は白く、絹でできた金髪はまばゆく光り輝き、薄い紗の衣が風になびく。彼女たちの足先から膝まではサフランの香り、膝から胸までは、麝香の香り、胸から首までは竜涎香の香り、首から頭頂までは樟腦の香りがする。10本の指は指輪、腕は金の腕輪、踵は、真珠と宝石の鎖で飾られている。このような美女が、天国の各住人に配偶者としてあたえられ、真珠でできた天幕の中で歡樂の時を過ごす。

それでは、天国では、男たちはフリーと結婚するのだろうか。この世での妻たち、子供たちとの家庭生活は来世には存在しないのだろうか。しかし、コーランには「かれらは、その祖先と配偶者と子孫の中の善行に励む者といっしょにエデンの園に入るであろう」(13章23節)ともいわれているので、天国でもこの世の家庭生活は維持されるようにも思われる。フリーは、正式の妻ではなく、妾なのかもしれない。現代のムスリムの中には、この世の妻が、天国ではフリーに変身するのでであると解釈する人もいる。

神との面会

天国での快樂は、贅沢に飲んだり食べたりすること、黒い瞳の美女たちから歓待を受けることだけではない。天国の住人にとって最大の快

楽は、神と直々に対面することである。神を見ることができるかどうかは神学上の大問題となったが、多数派であるアシュアリー派は、来世で神を見ることができるということで意見の一致をみている。ある伝承によると、預言者ムハンマドは、満月を見ているときに、「あなた方は今、満月を見ているようにはっきりと、神を天国で見ることができるでしょう」と言ったという。天国の住人たちは、毎金曜日に神と謁見する。男たちは、ムハンマドを先頭に、女たちは、ムハンマドの娘ファティマを先頭に、集団で神の玉座の前に集まる。そこで神は、光のヴェールを取り、みんなの前に姿を現し、「あなたがたに平安がありますように」と各人に挨拶するという。この神の声は、天国のあらゆる音楽よりもすばらしい響きであり、この神との面会の喜びは、天国の他のあらゆる快楽を忘れさせてしまうほどである。

哲学者たちの来世観

以上にみたように、コーランとハディースを基礎にした伝統的なイスラームの天国のイメージは、非常に具体的で、感覚的なものである。そこでは、神でさえ感覚的なものとしてとらえられている。もちろん、このような考え方に疑義を抱く人々もいた。その代表がイスラーム哲学者たちである。不死の靈魂と死するものである肉体は全く別なものであるというギリシャ的な二元論から深い影響を受けた哲学者たちは、肉体の復活ということ自体に疑いを持った。この世では靈魂は肉体という牢獄の中に捕らえられている哀れな状態にあると考えていた哲学者にとって、肉体の復活は、決して好ましいものではなかったであろう。彼らによれば、肉体の死後、肉体から解放された靈魂は、「第10知性」と合一する。「第10知性」とは、神から段階的に流出する10の知性の最下位のもので、月下界を司る知性である。ここで、「知性」と訳した「ア

クル」は、思惟という意味でもあるので、第10知性とは思惟する者である。哲学者によれば、神も自己自身を思惟する者であり、この神の思惟から、第一知性が流出する。つまり、死後、人間の靈魂は、肉体の枷に煩わされないで純粹に思惟する者となるのである。思惟こそ、最大の快楽であり、神的な行為でもある。哲学者によれば、この至上の快楽を、哲学を理解しない一般大衆に理解可能なように比喩を使って説いたのがコーランやハディースにあらわれる伝統的な天国の記述である。

このような哲学者の来世観は異端として厳しく批判されたが、彼らの比喩的解釈は、あまりに官能的な来世観に違和感を持つスーフィーたちの間にある程度の影響を与えたように思われる。

この世の禁欲と来世の快楽

イスラームの天国の官能的性格は、しばしばキリスト教徒によるイスラーム攻撃の対象となった。しかし、イスラームでは来世が快楽的な分だけ、この世で禁欲的だといえよう。天国で許されている多くの快楽は、この世では禁じられているものである。来世では食べ放題、飲み放題だが、この世では1カ月の断食が義務として課せられているし、酒も禁止されている。また、預言者ムハンマドは、金や銀の器で飲み食いすることや、絹や錦を身につけたり、その上に座ったりすることを禁じたが、天国では、これらが頻繁に使われている。つまり、信者たちは、この世でイスラームの厳格な戒律を守った褒賞として、この世では禁じられていた快楽が来世では約束されているのである。来世まで我慢できずに、この世で禁じられている快楽にふけた者には、来世では、恐ろしい地獄行きの運命が待っている。イスラームにおける地獄の描写も、天国と同じように生々しい迫力のあるものであるが、地獄については、また次の機会に稿をあらためて論じたい。